

第2章 都市近郊型グリーンツーリズムの実際——— (テーマパーク型)

1、全国の事例

(1) 三重「伊賀の里モクモク手づくりファーム」

① 豚・牛と焼き物が盛んな伊賀の里

三重県阿山町は、人口8,612人(96.3)、世帯数2,194、内農家1,056戸、滋賀県との境に位置し、伊賀豚・伊賀牛と伊賀焼で知られた里である。この阿山町で、グリーンツーリズムの拠点として、また、地域の農業の担い手として活躍しているのが「モクモク手づくりファーム」である。

② 手づくり・安心の豚肉加工をめざす

「モクモク手づくりファーム」は、その名が示すように、自分たちが育てた伊賀豚を自分たちの力で加工し、販売したいという夢を実現するため、87年に設立された「伊賀銘柄豚振興組合ハム工房モクモク」が前身となっている。元経済連職員、経営革新を目指す畜産農家など19戸が共同出資して設立された。

組合は消費者の信頼を獲得するため、「手づくり」「素朴」「純粹」「安心」「無添加」の豚肉加工品の開発をすすめた。同時に、「自分で確かめたい」「自分も体験したい」「自然の中で余暇を過ごしたい」という期待を実現する交流・販売・体験の施設・空間を創りあげる取り組みをすすめた。

この戦略を一層発展させるために、93年には組合を、生産・加工・交流に責任を持つ「伊賀の里モクモク手づくりファーム」と、流通・販売に責任を持つ「農業法人モクモク」に再編し、さらに95年には、この戦略拠点となるファクトリーパーク「モクモク手づくりファーム」を開設した。

③ モクモクの七つの理念

「モクモク手づくりファーム」の理念はユニークで、次のような七つのテーマからなっている。

- イ) モクモクは、農業振興を通じて地域の活性化につながる事業を行います
- ロ) モクモクは、地域の自然と農村文化を育てる担い手となります
- ハ) モクモクは、自然環境を守るために環境問題に積極的に取り組みます
- ニ) モクモクは、おいしさと安心の両立をテーマにモノづくりを行います
- ホ) モクモクは、「知る」「考える」ことを消費者とともに学び、この感動を共感する事業を行います
- ヘ) モクモクは、心の豊かさを大切に、笑顔が絶えない活気ある職場環境をつくれます
- ト) モクモクは、協同精神を最優先し、民主的ルールに基づいた事業運営を行います

④ ファームの事業内容

1. 「手づくり体験館」(A・B)
2. 「地ビール工房伊賀の里モクモクブルワリー」
3. 「生ハム専門館」
4. 「ウインナー専門館」
5. 「焼豚専門館」
6. 「バーベキュービアハウス」
7. 「ジゲンプラザ」(伊賀の里特産品の販売)
8. 「ファーマーズマーケット」(地場野菜と花の販売)
9. パン・パスタ・ピザ製造・販売(国産小麦「農林61号」使用)
10. 子供教育ファーム「のんびり学習牧場」
11. 「野天もくもくの湯」
12. イベント企画
 - ・「ぶたのテーマ館」(キャラクター『ハム蔵』のアトラクション)
 - ・「ミニブタダービー」「子豚追い柵入」・「豚と真珠」など

⑤ モクモクネイチャークラブを核に

「ファーム」での固定客やリピーターを確保する交流組織が、「モクモクネイチャークラブ」である。入会金2,000円で会員になれるこのクラブでは、ファームへの無料入園、ハムなどの特別割引、通信販売カタログの送付、イベント開催などの各種サービスを行っている。

また、クラブ会員(21,000所帯、96年現在)を対象に、たけのこ掘り、松茸狩り、草だんごづくり、生ハムづくり、稲刈り体験などさまざまな体験型イベントを開催している。

⑥ 地域農業の先導役

「ファーム」では、本場ドイツの技術を導入して名産伊賀銘柄の豚を原料とした手づくりハムとソーセージを造っている。

また、「ファーム」内にある「地ビール工房伊賀の里モクモクブルワリー」では、『麦からビールまで地元で一貫生産してこそ真の地ビール』との考え方から、地元農家で作付け・収穫した大麦を原料に使うビール作りに最も大切な麦芽モルトをつくっている。地ビールの製法や設備、技術指導は、ピルスナービール発祥の地チェコから導入した。

⑦ 全町的グリーンツーリズムをめざす

熱血的な畜産農家たちの志と行動により「ファーム」は、売上高25億円（97年度）、入場者33万人、従業員98人という大組織にまで発展してきた。

町では、「ファーム」を町おこしの核として支援しながら、93年に「ふるさとの森整備事業」を総事業費約8億円で始めた。現在、「ふるさと資料館」、「野外ステージ」、「ふるさとの森会館」、「キャンプ場」、「ロッジ」などを開設した。町民の憩いの場、レクリエーションや文化活動拠点として利用しながら、また外部との交流拠点として活用し、町内のむらづくり運動と連携した全町的なグリーンツーリズム化を推進している。

⑧ こだわりのモノづくりとマーケティング

「モクモク手づくりファーム」には、徹底した消費者ニーズの把握と情報発信力があると、長谷山俊郎氏は分析している。

1) 「モクモク」の産品開発とマーケティング

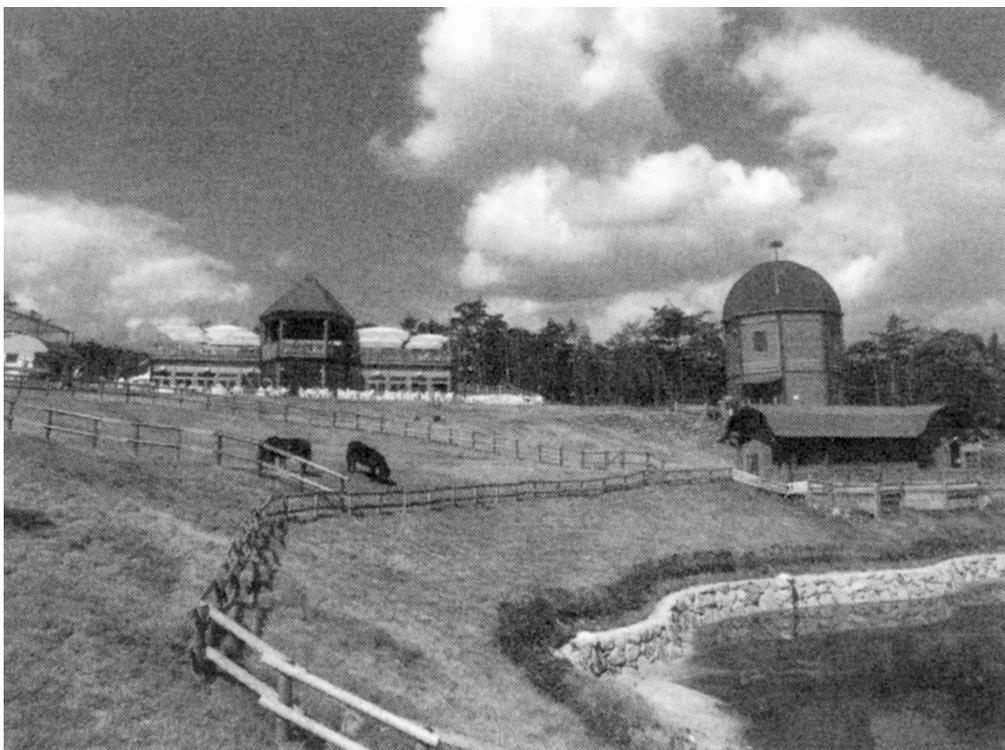
- (イ) 生活者の発想（こんなのが食卓にあったらいいな）
- (ロ) 田舎の時代の追求
- (ハ) 手づくりの貫き
- (ニ) ストーリー性を重視した開発（ネーミングしてから商品開発）
- (ホ) 運動と事業を連動させた対応（新しい農のあり方、町づくり）

2) 情報発信力の手段

- ・年30～35回におよぶ小イベントの実施

- ・魅力ある会誌（年6～7回）と通信（毎月）発行
- ・パブリシティの活用（485件、98年）
- ・ウイナー教室の活用（年約60,000人利用）
- ・クラブ会員からの意向把握
- ・団体客へのていねいな視察対応

など、消費者とのコミュニケーションを重視した姿勢が「モクモク」人気の底流にある。トップをはじめ社員の全国先進事例に対する貪欲なまでの視察研修が、モクモクの次々と必要な手を打つ原動力になっている。



【伊賀の里の広大な丘陵地にひろがる「モクモク手づくりファーム」】

(2) 京都「美山町北集落・自然文化村」

① グリーンツーリズム先進事例——京都・美山町の取り組み

美山町は、京都府の中部・丹波地方にあって人口5,628人（96.3月現在）、世帯数1,902の中山間地域の町である。美山町には、今日的グリーンツーリズムに繋がる典型的な取り組みを見ることができる。

美山町は、78年（昭和53年）「住みよいふるさとづくり」運動を展開し、全戸への意向調査と延べ174回の集落座談会を開催した。その話し合いの中から、80年に町内58集落すべてに農事組合と造林組合が結成された。これがスタート台になって、農村生活環境整備事業、環境保全事業に発展していく。同時に、集落ごとの生活改善運動が取組まれ、女性や高齢者がグループ化され、農産物加工・販売、野菜・花きの無人直売所、朝市などが次々と開始された。

② 集落経営型ビジネス——美山町芦生（あしう）なめこ生産組合

93年に6戸9人で、なめこの生産・販売のために設立、今日にいたっている。芦生なめこ生産組合は、山菜・漬物加工・販売のアグリビジネス化を基本に、エコツーリズムのガイドや宿泊施設・レストランの運営と木工工芸を協業した集落経営として展開していることに特徴がある。94年度は1.7億円の売上、入込み人数15,000人の実績であり、過疎山村における産業の多様化モデルとして注目できる。その後、同組合が、当初の集落営農型のアグリビジネスから、グリーンツーリズム関連経営を含めた集落経営へと脱皮してきたことがわかる。

③ 伝統的農村景観を活用した——美山町北集落

京都・美山町の北集落は、新しい農村産業の多様化の先進事例であり、宿泊施設やレストラン、かやぶき資料館などのグリーンツーリズム施設を中心とする集落経営のモデルである。今日の施設運営方式が確立したのは、92年の集落全戸の46戸加入による「北村かやぶき保存会」設立にはじまる。北集落のかやぶき民家群が、93年11月に「伝統的建造物群保存地区」に指定されるのを契機に、伝統的農村景観を活用したグリーンツーリズムによる北集落の地域経営をおこなうことが、同保存会設立の目的である。

設立以前にあった「かや生産組合」「ふるさと産品部会」（北村きび工房）は、保存会設立と同時に部会組織として吸収され、その後、「かやぶき資料館」「お食事処きたむら」「民宿

またべ」として今日にいたっている。同保存会の集落経営は、水稲以外にかや・きび・野菜生産の農業経営と、「ふるさと産品部会」によるアグリビジネスおよび、その他の部会によるツーリズム関連経営を一体的におこなう農村産業の多様化に成功している点で注目できる。



【美山町・北集落のかやぶき民家】

④ 都市住民との交流拠点——自然文化村・河鹿荘

グリーンツーリズムの多様なニーズに応える都市住民との交流拠点「美山町自然文化村・河鹿荘」が開設された。

1) 主な施設概要

- (ア) 宿泊施設「河鹿荘」
- (イ) 「河鹿荘新館」(バラ風呂・薬草風呂)
- (ウ) 宿泊研修センター「やまびこ堂」(コンサート・音楽合宿)
- (エ) かやぶき民家別館(いろり・宿泊・宴会)
- (オ) 創作体験実習館
- (カ) 文化ホール
- (キ) 第1・第2オートキャンプ場
- (ク) いきいきドーム(屋内多目的運動場)
- (ケ) テニスコート・野球場
- (コ) バラ園・観光りんご園

2) 自然文化村の特徴は、四季を通じた体験イベントにある。体験志向の比較的若い都市住民のニーズに応じている。

・野草教室・手作り味噌・手作りバター・田舎のおもちつき・りんご狩り・竹馬作り・凧作り・お手玉作り・鮎つかみどり・陶芸・紙すき・わらぞうり作り、など

⑤ 美山町はグリーンツーリズムのテーマパーク

美山町では、かやぶきの里北集落、京都府の屋根といわれる山並みと山村、由良川の清流、伝統文化、農業、高齢化社会といったあるがままの生活文化がグリーンツーリズムの資源となっている。

町内には、約280戸(全世帯の16%)のかやぶき民家が残るわが国最大のかやぶきの里である。これらは、ふるさとの原風景として同町の景観づくりに貢献しており、民宿、美術館、民俗資料館としてグリーンツーリズム資源になっている。

美山町を囲む美しい山並みは、地元ガイドつきの「芦生原生林ハイキングコース」として人気を高めている。林業に従事する住民も多く、木工工芸、炭焼き、枝打ち、下草刈などの森林作業体験が実施されている。また、山の幸も豊富で、わらび・ふき・ぜんまい・きの

こ・木の芽などの山菜料理や、やまめ・いわな・あゆなどの溪流料理は、伝統食文化であり、町内の農村レストランや民宿・旅館で提供されている。

農業を資源としたグリーンツーリズムには、観光農園、滞在型市民農園、ハーブ園などがある。この他、定期市、無人直売所、産直交流会を通して都民との交流をひろげている。

また、美山町には、多くの芸術家や文化人が移住してきている。新しい移住者は、同町におけるグリーンツーリズムに芸術文化の性格を付与している。写真ツーリズム、俳句ツーリズム、落語ツーリズム、陶芸ツーリズムなどが小グループ単位でおこなわれている。

豊かな「自然資源」、かやぶき民家「北集落」、体験プログラム重視の「自然文化村」、それぞれがグリーンツーリズムの世代的なニーズの違いや、宿泊型・日帰り型などの多様な目的に応えることに成功している。

⑥ 推進主体「ふるさと塾」と「21ふるさと京都塾」

グリーンツーリズムは、「村づくり運動」「都市と農村の交流」「農村住民のビジネスとしての地域経営」の三つの視点を基礎としている。京都型グリーンツーリズムは、とりわけ「村づくり運動」（市町村の『ふるさと塾』）を重視して取組んだことが民間主導のグリーンツーリズムを展開する原動力となっている。市町村の「ふるさと塾」運動を通して、人づくりと地域アイデンティティの確立を図り、住民エネルギーの蓄積につなげたのである。市町村の「ふるさと塾」の活動は、農村住民間の交流とビジネスへの取り組みを誘発し、その過程で、都市型の応援団も生まれ、京都型グリーンツーリズムが形成されたのである。

特筆したいのは、90年に学際を集めて設立された『21ふるさと京都塾』の存在である。彼らが理論的支柱となり、市町村の「ふるさと塾」を牽引し、バックアップしたことが、個人的、京都型グリーンツーリズム形成につながっているのである。

〔21ふるさと京都塾〕

京都における「21世紀村づくり塾運動」のローカルセンター。市町村塾へ専門家や専任のアドバイザーを派遣して市町村塾運動の活動を支援するほか、京都におけるふるさとづくりに関する調査研究や塾運動のリーダー育成、交流情報誌『ふるさと』の発刊などをおこなっている。

2、茨城県の事例

(1) 茨城町「ポケットファームどきどき・森の家庭料理レストラン」

「ポケットファームどきどき」は茨城町の6号国道近くにあり、JA茨城の経営により、次のような内容で展開している。

① 森の家庭料理レストラン

地元でとれた新鮮な野菜を使ったヘルシーな家庭料理というコンセプトで、バイキング形式で行っている。コンセプトを示す7つのメッセージを提示している。

- 一番美味しい旬の野菜を提供します。
- 原材料の種類、産地名や調味料の内容を言葉で知らせます。(料理の完成時に大きな声でその内容を客に良く分かるように説明しながら出す。)
- おいしく食べていただける体にいいお料理づくりをこころがけます。
- 家族でゆっくり楽しめるレストランを目指します。
- レストランで提供する料理の調理法をすべて教えます。
- 笑顔とあったかさのあるおもてなしをします。
- おいしいお食事と心地よい音楽をお楽しみください。(ピアノ生演奏あり。)

価格：ランチコース大人1,260円、ディナーコース大人1,365円

料理種類：約70種類と多種類、煮物が多い、薄味、

所長のおすすめ料理：タラコの Pasta・黒糖入りぜんざい・最進のサバ・こだわりのティアカレー・麦とろ御飯・あまーいポテトコロッケ・日替わりのお惣菜

非常に評判がよく繁盛している。客は時間を予約して待たされる。コックは研究熱心な修行を積んだ方である。料理の味はなかなか素晴らしい。Pastaの味は実に美味しい。料理全般について、非常に丁寧に、ありきたりの家庭料理にならないよう、高級な仕上げとなっている。出されている料理は種類が多く、豊かな雰囲気を作っている。ピアノの生演奏も聞けるのは楽しい。レストランは素朴ではあるが、洒落た造りで広く、周囲は雑木林であり、観光地のレストランの雰囲気である。従業員の対応は、教育が行き届いており、自然な笑顔できちんと説明する。レストラン案内の説明資料は丁寧に作られている。価格とサービス内容を周辺のレストランと比較しても、十分に競争力のある存在である。一度訪れると、再び行きたくなる魅力あるレストランである。

② ファーマーズポケット

一般的な直売所の2倍以上の広さの売り場に、豊富な品揃いの野菜類が並べられている。スーパーの野菜売り場に較べても、多彩な品揃えと新鮮さで圧倒できる力がある。来店客も多く、

活気がある。この直売所の中に手作りハム・ソーセージ工房と精肉コーナー、手作りパン工房、惣菜コーナー（キッチンポケット）、軽食コーナー、体験教室があり、顧客の多様な要望に応じている。

③ その他の施設

フラワーポケットは花、園芸用品の販売

バーベキュー広場

子供用市場（キッズマーケット）

キッズドーム

しゃぶしゃぶ池

木の葉プール

どきどき小さな動物村

(2) 下妻市「ピアスパークしもつま・体験型テーマパーク」

「ピアスパークしもつま」は下妻市を主体とした第三セクター方式により、茨城県下妻市の砂沼サンビーチに隣接して作られている。近くには、同じ第三セクター経営の繁盛して有名な「道の駅しもつま」がある。

① しもつま温泉・レストラン・ホテル・農産物主体の直売所

湧出量140リットル／分の豊かな温泉が、市民に憩いの場所を提供しているのが特長的である。温泉施設に宿泊ホテルがあり、宿泊の他、会議場としても使用できる。レストランは地ビールをつくり、販売している。しもつま温泉は1年間5万円のパスポートがあり、市民が安く常時使用できる様、配慮している。農産物主体の直売所は、地元の産品を中心に、一般スーパーとは一味違った品揃えを行っている。みやげ物なども工夫した仕入れにより、魅力ある商品を集めている。野菜と一緒に販売しているドレッシングは、一般市場に出回っていない業務用のドレッシングを販売している。施設内の清掃は、完璧に行き届いている。

② 手作り食品 美味工房ウイマム

手作りアイスクリーム、飲むヨーグルト、手作りクッキー、梨ジャム及び下妻の養豚の農家が育てた豚肉を使った手作りのハム、ウィンナ、ベーコンを下妻市の「下妻 食と農を考える女性の会」が施設内で作り、販売している。

③ ふれあい体験農場

全体面積27,000㎡の体験農場には果樹園、体験畑、田んぼがあり、これを見学、収穫体験が出来る。

(3) 八郷町「ゆめファームやさと・体験農園」

「ゆめファームやさと」は総面積4ヘクタールの中に、4種類の都会と農村の交流の場を設けている。場所は盆地の中にある丘にあり、周囲の山々に囲まれた盆地全体を見渡す、独特の美しい景色の中にある。八郷町農業協同組合は非常に活動的な新しい経営の展開を精力的に行っており、経営姿勢は時代の先を見つめた迫りに満ちたものである。行動が果敢であり、次々と新しい展開を生み出そうとしている。プレゼンテーションのパソコン資料は手作りではあるが、洗練された立派なものである。

① ふれあい農園（グリーンツーリズム農園）

1) 生協とタイアップした農業体験型バスツアーコース

バスツアーコースを設定してあり、団体を受け入れている。

2) 学校総合学習の受け入れ

バスを仕立てた集団での参加を受け入れている。千葉県浦安市の中学校、東京板橋の中学校などが参加する。板橋の中学校は5年続けて訪れている。

3) 9月から11月は各地のお祭りに料理教室を開いて参加

担当の課長は調理師の資格を持っており、専用の看板も取り付けた車を用意している。

4) 料理用の煮炊きの出来る設備もあり、バーベキューなどを楽しむことが出来る。

② 貸農園

一区画30㎡の貸し農園である。八郷地区は積雪も無く、年間を通して多彩な野菜の栽培が楽しめる。

③ 休憩交流施設「ゆめはうす」

和室12帖2室、6帖1室、ホール、風呂、台所完備の施設である。手打ちそば教室、味噌教室の他、料理を通しての交流、生産者と消費者との交流の場として使用する。

④ 新規就農研修農場

八郷農業協同組合では有機農業を推進している。八郷地区は山間部が多く、耕地も狭く、老人と女性が有力な働き手になっている。このような環境の中で市場に出てゆくためには、独自の工夫した経営姿勢が必要と考え、有機農業を推進してきた。2001年有機農業法が制定され、八郷農協の参加者は全戸認証を受けた。現在24名が参加している。この有機農業経営を柱にして、新規就農研修農場を行っている。「ゆめファーム農協農場」において2年間、農協から給料を支払って研修する。機械は農協から貸し出す。毎年1家族を受け容れ、既に4家族が終了している。研修生の人選、教育は現在では卒業生が行っている。なおこの研修生以外にも毎年新規に農業を始める人が2～3人居る。(巻末付表4参照)

(4) 八千代町「やちよグリーンビレッジ・市民ガルテン」

関東平野の真中にある八千代町の芝生と池で構成した公園（八千代グリーンビレッジ）に隣接してつくられた滞在型の市民農園である。公園内には1500Mの地下から湧き出している温泉のある憩遊館がある。一区画270㎡の土地に、小型の別荘風の洒落た建物（29㎡）が20棟あり、使用料は年間40万円（光熱費別）と安く、5年間まで延長可能である。平成16年開始であるが、20棟全棟入居している。入居者は関東一円からの参加者である。いずれ立派に農作物を栽培している。近所の農家とも親しく付き合い、農業技術の指導を受けている。特長的な点は次のようなものである。ニーズを良く捉えた成功例である。

- 珍しい存在としての平野の中の市民農園
- 温泉まで備わった農村公園に隣接している。
- 建物のデザインが秀逸である。形状、色彩とも洗練されている。
- 年間使用料40万円は安い。

建物、環境共に初めに紹介された際のパンフレットに較べると、実物の方がはるかに立派なものであった。（巻末付表5参照）